

《シンポジウム》

2012 年度シンポジウム司会報告

司会 川添信介

昨年に続き「中世におけるプラトニズム」を課題とした 2012 年のシンポジウムは、「トマス・アクィナスおよびイスラーム」を副題として開催された。中世哲学会としては 1975 年・76 年のシンポジウムのテーマとしてプラトニズムを掲げてから、35 年ぶりに同じテーマを取り上げたことになる。その意義については、このシンポジウム企画チームによる「序説」(『中世思想研究』54 号, p.102) で記されているとおりでであろう。2012 年度のこのシンポジウムの司会を務め、昨年度のシンポジウム記録を読み、さらに 35 年前のシンポジウム記録を再読してみて、思うところを多少述べさせていただき司会報告の責を塞ぎたい。

1. 本年度のシンポジウムでは最初に松本耿郎氏が「イスラーム思想と新プラトン主義」という副題のもとで報告された。この発表が「中世のプラトニズム」のテーマのもとでなされたことが、まずは 35 年前との研究状況の相違を端的に示している。「中世における」というときに、ラテン・キリスト教圏の哲学だけを論じることではもはや不十分であり、他の言語・文化・宗教を背景とした哲学との連関が考慮に入れられなければならないことが、現在ではいわば自明視されるようになってきている(実は今回ユダヤ思想圏におけるプラトニズムについても何がしかの報告がなされる予定であったが、諸般の事情のもとで行われなかったことはまことに残念であった)。

もちろん、本「中世哲学会」が実質的には「西欧あるいは西洋中世哲学会」であることは言うまでもないことである。それゆえ、昨年と今年のシンポジウム提題も、松本氏によるものを除けば、アウグスティヌス、ボエ

ティウス、サン＝ヴィクトール学派、トマス・アクィナスと西欧の思想家たちを主たる対象としている。とはいえ、昨年のシンポジウムと関連した特別報告では、山内志朗氏はイスラーム思想（とりわけアヴィケンナ）との関係で超越概念の問題を論じられた。「中世の哲学」とはユダヤ、イスラーム、キリスト教（東西両方）の3つの宗教圏で「一つとなってなされた哲学だった」と言うのは言い過ぎだとしても、少なくとも12世紀以降の、文化的後発地域であった西欧の哲学の歴史的理解にとって、ユダヤ・イスラーム思想への「応答」ないし「対話」という側面への注目は必須のことであると言えよう。

その松本氏の提題は、9世紀のラーズイーから17世紀のサドラーに至るイスラーム哲学において、新プラトン主義が一貫してその基盤をなしていることを明快に示されたものであった。その場合「新プラトン主義」とは、(1) 究極原因としての一者の指定、(2) 一者の自己認識による万物の流出、(3) 非物質的な魂の一者への還帰、という3点によって特徴づけられている。シンポジウム当日のフロアーからの質問は、(3)の点に関わっていた。すなわち、主としてサドラーの『四つの旅』における認識の完成と心の浄化とがいかなる仕方に関係しているのかという論点であった。これに関わるフロアーとの議論が深まったとは言えなかったのは残念であったが、アリストテレスをも受容した新プラトン主義が持っていたいわば「学的・理論的」哲学の側面が、超越者との合一という神秘的であるとともにいわば「実践的」な哲学の側面とどのように重なり合っているのかという問題であったと言えるであろう。西欧の側の「プラトン主義」にも同型の問題は存在していたはずであって、イスラーム圏でのあり方との相違がどのようなものであったのかは、興味深い問題として残されたように思われる。

2. 上枝美典氏と荻原理氏の提題は、初めから「対話」として構想されたものであった。アリストテレス主義者であるアクィナスの「エッセ」は、プラトンのイデア論の理論構造を持っており、不整合を含みこんでいるのではないかという上枝氏の立論に対して、ギリシア哲学を専門とされる荻原氏がパルメニデス的一元論に関するアリストテレスの理解を上枝氏とは別の仕方では提示することを中心にして批判を展開された。

この「対話」の仔細についてはお二人の明快な報告論文そのものに譲らざるを得ないし、両者の立論の当否をここで述べることはもちろんできない

い。ただ、当日のフロアーからの複数の質問が、アクィナスの「創造論」をどのように理解すればいいのかという論点に関わっていたことと関連して、次のことを感想として記しておきたい。このフロアーからの疑問は当然の疑問であるように思われるのであるが、しかし上枝氏の立論に拠るならば、「神が神にとって他者である被造物を創造することは、理論的に不可能となる」はずであって、ある意味で的を外れた疑問であるかもしれない。上枝氏は「アクィナスはエッセする被造的世界を前提として、エッセそのものである神という理論を立てたのだが、その理論では被造的世界がエッセするというを説明できないことになっている」と主張しておられると理解できるからである。これに対して「アクィナスにとって創造論が根源的である」と言い返すことは、正面から上枝説に反論したことにはならないと思われる。

とはいえ、荻原氏の方が「存在そのもの」の措定は、……トマスの体系にとってまぎれもなく根本的だと思われる」と述べられていることにも現れていると思われるが、何らかの意味で「實在」をすくい取ろうとする「理論」には、その理論の「外部」が理論を支えている面があると言うべきかもしれない。哲学は確かに「理論の網の目」を構築する行為ではあるだろう。何らかの主張とそれと矛盾する別の主張とを無批判に並置することが許されないことは当然である。しかしながら、世界全体を捉えようとする理論が、その根底において、何らかの論点先取であるような循環を含んでいるということは、その理論の致命的欠陥として排除されるべきなのであろうか。神である「エッセそのもの」と被造物の「エッセ」をともに認めるといふアクィナスの「理論」は、仮に不整合を含むとしても、また、だからといって「信仰」に訴えるしかないという意味においてでもなく、有意味な哲学理論であると考え余地はないのであろうか。

以上のように、上枝・荻原両氏の鋭利な対話は、少なくとも私には「哲学的理論とは何か」ということにメタレベルの反省を迫るものであった。そしてこのことは、歴史的探求としては、プラトンの「哲学理論」、アリストテレスの「哲学理論」、パルメニデスの「哲学理論」がそれぞれ「いかなる意味での理論」なのかということを考えさせることにもなったはずである。そのような先駆者たちのメタ理論を背景としながら、アクィナスの体系内の「エッセ」という内実的理論がもつメタレベルの意味づけを考察することが、課題として残されているように思われる。

3. 以上、司会を務めた後に個人的に思うところを述べさせていただいた。イスラーム圏を含めた「プラトン主義」が中世の哲学に歴史的に決定的で広範な影響を与えていたことは言うまでもないことである。このことは35年前と同じであろう。しかし、前回と今回のシンポジウムによって、プラトン主義のインパクトが歴史的にも理論的にもよりニュアンスに富んだものとして現れてきたとすれば、35年をへて大きな進展が確認されたことになる。

〈提 題〉

中世のプラトニズム

——イスラーム思想と新プラトン思想——

松 本 耿 郎

1 本稿においてはイスラーム世界において営まれた哲学をイスラーム哲学と呼ぶことにする。イスラーム世界の多くの哲学的著作がアラビア語で書かれていることもあり、かつこれらの哲学的著作をあらわした人々のなかにはキリスト教徒（東方キリスト教会系の）やユダヤ教徒も相当数混ざっているためにイスラーム哲学と呼ぶよりもアラビア（語）哲学 Arabic philosophy と呼ぶ方がより相応しいという主張もある。¹⁾しかしながら主要なイスラーム世界の哲学的著作の作者たちは基本的にイスラーム教徒であり、イスラームの教義の枠組みとの関係を基礎に思索し、著述しているので、イスラーム哲学という呼称はあながち不当であるともいえない。

このイスラーム哲学は主としてギリシャ哲学の翻訳文献から出発している。イスラーム哲学者たちは翻訳されたギリシャ哲学文献のなかでもプラトン、アリストテレス、プロティノスの三思想家の著作から強い影響を受

1) “*The Cambridge Companion to Arabic Philosophy*”, ed., by Peter Adamson and Richard C. Taylor, Cambridge University Press, 2005, p. 3.